戦評　　経3　寺本喜宥

「戦評」といっても客観的な戦績は、スコアーを見ればそれで事足りるし、自分にとって4か月以前の事を客観的かつ詳細に想起することは不可能に近く必然的に自己の印象に従って戦評を書くということになる。従ってここでは主観的、個人的体験を基にした「七大戦の感想」を記してみたい。

可児に於るレギュラー合宿を済ませ、東海国立戦優勝の波に乗った我々の目標は「優勝」であった。事実当時のクラブ内の盛り上り、技術的調整などを考えると、精神的、肉体的に最高状態にあり「必優勝」を期して、入洛したのも当然であった。その際、我々の注意すべき事は、「如何にして勝つか」ではなく、「如何にして取りこぼしのないようにするか」であり、総合的に判断して、着実に一戦一戦を勝抜いていくことが最も大きな課題であった。

さて、初日、二日の取りこぼしもなく然に勝ち進み、予想通り全勝の末、最終日を迎え、残すは対関大戦のみとなった。予想通りだったとはいえ、従来手に負えぬと考えられていた「大きな獲物」を前にしてさすがに興奮し、血気にはやり一種異様な状態であった雰囲気を覚えている。自分自身も異様であった。半ば自己の手中に収めた獲物を絶対に阪大に奪われてはならぬという意識過剰による緊張感で体がこわばるような感じる。喉が乾く。落着いていられない。必要でもないのに体育館を走ってみる。皆の顔、態度からも強い緊張感が感じられる。先ず自分が落着かねばと自分に言聞かせるのだが体がそれに応じてくれない。自分達より以上に緊張している阪大のレギュラーの練習を横目でみながら、安堵す

る。不安、緊張、安心感が錯綜し、混乱した状態。これが試合開始30分前位の状態であった。

戸外に出て日光を浴びながら気持を落着ける。そのうち突然

不安、心配が一掃され体内に「やるぞ！」という気持と「勝つぞ」という強い意欲が充満し、緊張感がほぐれていくのを感じる。緊張の極限から落着いた「静」の世界へ------。「マイペースだ」と一人で微笑む余裕さえでてきた。これが開始10分位前の状態であった。

試合に突入してからは、必死になって戦った。それだけしか憶えていない。そして試合後は説明し難いような一種の虚脱状態であった。

以上が一個人の体験的な七大戦の感想であるが、こゝで少し冷静に七大戦の勝因を考え、今後の発展の基礎づけをする必要があるように思われる。では優勝を獲得できた原因は何であっただろうか、ともかくその第一因が全部員の団結にあった事は間違いない。各部員がまさにクラブ内に於る自己の位置づけをよく確立していた。この意味で部員の勝利への貢献度は全く等しく、七大戦の優勝は全部員のものであると公言できよう。

第二に、第一因と密接不可分な相関関係にあるのだが、クラブ内に優勝への意欲、上昇発展的雰囲気が溢れていた事が挙げられる。これは頃度愛知リーグに於る初優勝時の雰囲気を想起させるものであり、「勝利の栄冠」を獲得するに、クラブ内の雰囲気の如何に重要であるかを我々に再度痛感せしめるものであった。

第三に技術的な実力差が挙げられる。かなり控え目に見ても、我々の実力と他校の実力との間に相当な差を認めることができる。レギュラーとして出場した4人は七大戦の水準では、一人一人が最高水準に位置し、一線級の技術を持っていたといえる。

以上、思いつくままに要因を類別したが、本来これら要因は決して独立的、相互無関係的な関係で作用するものでなく、一体となって結合し一つの全体となって、複雑、微妙に作用するものであり、ここに勝利獲得の困難さが存すると思われる。七大戦から得た最大の経験、今後の発

展のために積極的に導入すべき教訓は「勝利獲得の為には、総合的な全ての条件が満たされねばならない」ということであろう。その為に我々部員が何を為すべきかは自明であろう。

以上の如く、七大戦に関する戦評を書こうとすると、ともすれば「優勝」という大きな陰に反省すべき点が隠れがちであり、更に何カ月も以前の試合を顧みるのであるから、必然的に結果論的になり、一層この傾向に拍車をかけることとなる。しかしこゝで来年の七大戦を考えてみると、2D、5Sとなり一層充実した選手層を要求している。このことが「現在の我々のクラブで如何なる意味をもっているか」を考える時、余程の覚悟で前進しなければ、王座維持ということはまさに至難であろう。一層の奮起を望む由縁である。

最後に、お忙しい中を連日、京都まで応援に駆けつけて下さった吉岡先生に深く感謝致します。

—完—

東海大学選手権

男子団体戦　—優勝—

一回戦　対　岐阜大（3—0）

浅野 大曽根	2(15—1 15—2)0	今井 森	植田 本田	2(15—7 15—4)0	藤山 山崎
深尾	2(17—14 15—9)0	山崎			

二回戦　対　滋賀大（3—1）

寺本 本田	2(15—8 15—1)0	村岡 北村	浅野 深尾	2(15—4 17—15)0	丸山 松坂
植田	0(3—15 17—15)2	村岡	本田	1(8—15 15—10)1 棄権	北村
寺本	2(15—8 15—1)0	丸山			